

「満蒙は日本の生命線」とは

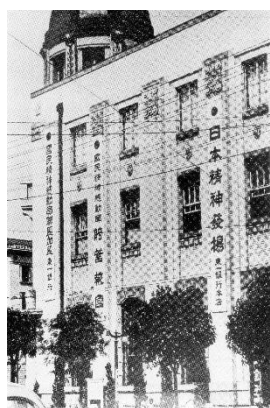
朝鮮を日本の「利益線」として確保明治政府は、近代化の遅れを取り戻し、世界に対抗できる国づくりをめざして、東アジアへの侵略を開始します。この出兵の口実として「朝鮮半島は日本の防衛のための利益線だ」とさかんに主張しました。日清戦争、日露戦争で、主に朝鮮半島の支配権を争いました。日韓併合を強行し、朝鮮半島を日本の植民地とします。同時に、中国の遼東半島の租借権(勝手に使う権利)を手に入れ、旅順新京(現長春)間の鉄道などの権益をロシアからゆすり受け、中国進出の足がかりにしました。こうした日本の支配に反対する「義兵闘争」が韓国全土をおおいました。日本軍は、義兵に対し村々を焼き払い、大量に殺害し、日本軍に非協力的な民衆もみせしめに殺傷しました。



1905年、日本政府は韓国政府から外交権を奪い、翌年には韓国統監府(初代統監伊藤博文)を設置、韓国を

被保護国としました。さらには韓国皇帝を退位させ、軍隊を解散させ、日本が司法・警察権を掌握するに至りました。こうした措置のうえで、1910年8月、「韓国併合に関する日韓条約」を調印して日本は韓国を植民地としました。(写真は『図説韓国の歴史』河出書房新社より)

朝鮮で唱えられた標語とスローガン



日本による朝鮮支配の特徴は、同化主義と武断主義にあったとされます。同化主義とは、植民地住民を内面的にも「日本人」にするという皇民化政策のこと。武断主義とは、武力で勝手に支配すること。写真には「日本精神発揚」「国民精神総動員」などの標語があります。(写真は『写真記録5・日中戦争』(ほるぷ出版)より)



日本の侵略に抵抗した朝鮮人は政治犯として処刑

《「満蒙は日本の生命線」の意味》

「満州」は、日本の中国との全面戦争を支える最大の補給基地の位置にありました。資源の少ない日本は、世界の列強と植民地獲得競争において、競争相手から食糧や工業原料の供給をあおいでいては、いつその供給を絶たれるか分らない不安がありました。

「満州」で生産された石炭鉄・非鉄金属などは、戦略物資として日本に輸出されました。また軍事的にも、満州はソ連に対する前線に位置し、満州、朝鮮へのソ連の南下を阻む主戦場とされていました。

ところが、ソ連の軍事力が急速に充実し、また満州での反抵抗運動の高まりのなかで、そうした勢力に対抗して、どんな手段に訴えても「満蒙」地域を絶対に確保しなくてはならないと主張するようになりました。

「満州国」建国



満州事変の現場

柳条湖爆破地点と中国人死体

(写真は『写真記録2 日中戦争』(ほるぷ出版)より)

朝鮮のつぎの目標は中国です。その時も日本政府は、「『満蒙』(中国の東北地方と内モンゴル)は日本の生命線」とさかんに宣伝しました。1927年(昭和2) 田中義一首相のもとで開かれた「東方会議」でその計画を打ち出しました。そこで提起された「対支(対中国)政策綱領」のなかで、「日本軍の出動もありうる」と明記していました。この方針のもとで関東軍の陰謀によって「満州事変」が勃発し「満州国」の建国へと突き進んだのです。



関連ホームページ

オンラインミュージアム

戦争と静岡

<http://www.shizuoka-heiwa.jp/?p=892>